

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成21年4月30日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 文学研究科

職 名 教授

氏 名 吉田和彦

事業区分	平成20年度・学術研究書刊行助成		
刊行書名	East and West: Papers in Indo-European Studies		
著者(編著者)名	Kazuhiko Yoshida and Brent Vine		
発行者名	Dr. Ute Hempen Verlag		
発行年月日	平成21年4月		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無		
会計報告	直接出版費 (内訳は下記のとおり)	1,666,087 円	
	収入見込額 (著者負担・売上見込)	366,087 円	
	当財団からの助成額	1,300,000 円	
	直接出版費の内訳		
	費 目	金 額 (円)	備 考
	組版代	1,055,500	
	製版代	-----	
	刷版代	88,000	
	印刷代	113,000	
	用紙代	165,250	
製本代	165,000		
消費税	79,337		
合計	1,666,087		

成果の概要 / 吉田和彦

インド・ヨーロッパ系諸言語は、東は中央アジア、インド、西はアイルランドにいたる広大な地域に分布している。また、歴史的には紀元前二千年紀に遡る古い文献を持つ言語がいくつかある。これらの言語を対象とした歴史比較言語学的研究は、今日のグローバル化時代のなかで、量と質の両面でめざましい発展を遂げており、10 数年前とは根本的に異なる状況にある。研究を著しく促進させた要因のひとつは、それまで旧ソビエト連邦をはじめとして特定の研究機関が所蔵していた文献資料が一般に公開されるようになったことにある。さらに、かつて単独では調査が困難であった地域における国際的な連繫によって、新資料が中央アジアやアナトリアなど、ユーラシア大陸の各地から発掘されてきたことも発展の大きな推進力となっている。これらは文献資料の追加という量の面から進展であるが、質の面でも個々の言語の解読作業やデータの言語学的解釈が着実に進展している。

このような状況において、欧米と日本人の言語学者がそれぞれの専門とする言語を対象にして最新の知見をまとめ、ドイツのHempen社から*East and West: Papers in Indo-European Studies*と題する論文集として刊行した。この論文集では、ユーラシア大陸の広大な地域で用いられていたさまざまな言語で書かれた文献資料が取り扱われている。このことは*East and West*という論文タイトルによく表れている。そのうち、最も東の言語としてはRonald I. Kim (Wrocław University) が扱った中央アジアで発見されたトカラ語、最も西の言語としてはCalvert Watkins (UCLA/Harvard University) の論文の中心的な分析対象のひとつである古期アイルランド語をあげることができる。またそのあいだに位置する言語としては、José Luis García Ramón (Universität zu Köln)、Jeremy Rau (Harvard University)、Brent Vine (UCLA)が考察したギリシア語諸方言(このなかには線文字Bで書かれたミュケナイギリシア語も含まれる)、Kanehiro Nishimura (Kyoto University)、Michael Weiss (Cornell University)が分析したイタリック諸語(オスク語やウンブリア語)、H. Craig Melchert (UCLA)が考察対象にしたアナトリア諸語(ヒッタイト語、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語など)、Stephanie W. Jamison (UCLA)、Werner F. Knobl (Kyoto University)、Masato Kobayashi (Hakuoh Univeristy)、Hiroshi Kumamoto (University of Tokyo)、Aurelijus Vijiūnas (National Kaohsiung Normal University)、Yutaka Yoshida (Kyoto University)が取りあげたインド・イラン諸語(サンスクリット語、アヴェスタ、コータンサカ語、ソグド語など)が含まれる。さらに、Jay H. Jasanoff (Harvard University)、Kazuhiko Yoshida (Kyoto University)は、印欧祖語の再建に関わる根本的な問題を論じた研究である。

京都大学教育研究振興財団からの助成によって刊行が可能となったこの論文集は、インド・ヨーロッパ諸語の研究分野で数多くの高度な学術書の出版を手掛けてきたドイツのHempen社から出版することができた。この論文集のなかで示された成果は広く国際的に発信されることになる。